

私もいつか見習わなきゃ

千葉県 園生小学校 6年 福興 佳倫

「あの～、かわりますか？」

と、混みあった電車の中で60才くらいのおばさんが、つえを持った足の悪そうなおじさんに言った。

「ああ、ありがとうございます。」

と、頭をちょっと下げながら、おじさんはホッとしたように言った。そのおじさんは足だけではなく声も悪くて、ガラガラの声だった。

「あの人、のどは平気なのかね。」

と私はババに、こっそり口をかくして聞いた。

「まあ大丈夫じゃない。」

と、ババと私は、その二人のいる前の手すりのところに立って言った。電車の中は人がいっぱい、立っている人も多かった。そして、その席をゆずってあげたおばさんは、

「足が悪くて大変でしょうね。」と云った。

「はい……。大変で、出かけるのもむずかしいんですよ。」

とボソボソと、あまり聞き取れない声でおじさんが言った。

「そうなんですか。」

おばさんは、その話を止めずにどんどん話し始めた。

電車は少しずつ席があき始めて、私とババはおじさんとおばさんのいる前の席にすわった。だから、さっきよりもずっと二人の話し声が聞こえた。何となく私は気になって、二人の様子を見ていた。

おばさんは、「じゃあ、私はここで降りるので、気をつけてね」と云ったあと、「お大事にしてください」とも云った。

「あの人すごいね。家族でもないのに、声をかけてやさしくしてたね。」

と、私とババはまたコショコショ話した。

「ああやって親切にできるって、いいね。」とババも云った。

私はふと、体の不自由な人に声をかけようとして、かけられなかったことを思い出した。学校の帰り道、すごくこしの曲がっているおばあさんがいたのに、どうしても「だいじょうぶですか」と声をかけられなかった。もしかしたら、声をかけても迷わくかもしれないと思うと勇気が出なかったのだ。

でも、さっきのおじさんのうれしそうな顔を見て、私は体の不自由な人を見たら、さっきのおばさんのように人のために役立つことをしたいと思った。

(人を笑顔にできるってすばらしいことだ。もう少し勇気を出そう。)

そう思って、電車のまどの外を見ると、夕日がやさしく私たちに射してかがやいていた。